

ホセア書2章8-9節 「神の賜物による偶像礼拝」

1A 神を知らない民 8

1B 穀物とぶどう酒の豊かさ

2B バアルという支配欲

3B 金や銀の力

2A 取り除かれる祝福 9

1B 時を定められる主

2B 露わにされる裸

本文

ホセア書 2 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、今日からホセア書に入ります。小預言書と呼ばれるところに入っていきます。午後に 1 章から 3 章までを一節ずつ読んでいきますが、今朝は 2 章 8-9 節に注目します。「8 彼女に穀物と新しいぶどう酒と油とを与えた者、また、バアルのために使った銀と金とを多く与えた者が、わたしであるのを、彼女は知らなかった。9 それゆえ、わたしは、その時になって、わたしの穀物を、その季節になって、わたしの新しいぶどう酒を取り戻し、また、彼女の裸をおおうためのわたしの羊毛と麻とをはぎ取ろう。」

ホセア書は、北イスラエルの王ヤロブアム二世の時、イスラエルに対して主がホセアを通して、言葉を与えられたものです。ヤロブアム二世の時の時代は、北イスラエルの歴史において最も物質的に繁栄した時でした。列王記第二 14 章 25 節に、「彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。」とあります。レボ・ハマテという、ユーフラテス川に近い町、すなわちシリア北部にまで領土を回復しています。南はアラバの海ですから、死海です大きな領土回復です。しかし、その理由は彼らが良いことを行なっているから、ということではなく、むしろ、彼らが悪いことを行なっているのにも関わらず、神が憐れんでそうしてくださっていることが分かります(26-27 節)。イスラエルが、偶像礼拝に陥っていたので外敵に攻められていたのです。けれども、そのように虐げられている彼らを見るのが忍びなくなり、ヤロブアムによってイスラエルを救われました。

したがってここ 8 節に書かれているように、王ヤロブアムの時代に、穀物と新しいぶどう酒、油が与えられていました。そして、収穫が多く与えられたので、金銀も増えてきました。それでイスラエルの民はそれらを与えてくださった主なる神に感謝し、この方に捧げるのではなく、従来のカナン人の偶像であるバアルに仕えたのです。その像を買うために、またその像に供え物をするために、主から与えられた金銀を費やしていく、ということをしていました。こうやって、その豊かさが、神から与えられた賜物であったのにも関わらず、かえってその賜物自体を神のようにみなすことによって、偶像礼拝の罪を犯していたのです。ヤコブの手紙 1 章 17 節に、「すべての良い贈り物、ま

た、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。」とあり、全ての良い賜物が神から出ているのに、それが偶像礼拝になっていったのです。偶像礼拝は、必ずしも悪いものだけでなく、良いものも偶像礼拝になります。

1A 神を知らない民 8

私たちが住んでいる国は、実に偶像に満ちています。どんな偶像か？と言いますと、単純に神社やお寺のことではありません。その偶像礼拝とは、「天地を造られた、すべての源であられる神に頼らなくとも、他の代用物で事足りている状態」のことです。別に神を意識していなくても、世の中で、そこそこの道徳や規範や規則を守っていれば、責め立てられることはありません。ですから、神の掟は必要と感じません。自分の魂に対しても、別に神を信じていなくとも、他に恵まれた環境があれば、それで満たされたということが出来ます。病にかかっても、非常に発達した医療技術と制度が、日本にはあります。だから癒しのために祈らなくとも、病院に行きさえすればよいのです。雇用もあるので、仕事にもあまり困りません。日毎の糧を与えたまえと祈らなくとも、スーパーマーケットにもコンビニにも、食べ物が置いてあります。問題が生じたら、その問題を解決するための相談役、いろいろなコンサルタントがいますね。何でもかんでも便利に揃っているのです。

その中で、私たちは、自分の命を支えているまことの神につながっておらず、いつも、いつも、自分自身に意識が向くような社会の中に生きています。ちょっと不快になれば、それを取り除くべく多大な労力を費やします。日本の製品やサービスは世界一と言われていますが、それは、そうした不便さ、不快さを究極までに取り除くという哲学があるからです。今は、電気製品などについて、数年使ったら、壊れるように敢えて設計しているという話さえ聞きます。壊れるというのは、不可抗力で起こるものですよ。そのことさえ、自分たちの設計によってコントロールする、管理しようとしているのです。そのような中において、私たちは神のほうに目が向かず、ゆえに周囲の人々にも真実な意味で目が向いておらず、自分中心になっています。「自分が、自分が・・・」と自我が増大して、それをどうコントロールすればよいか分からなくなっています。とても相手を気づかっているようでいて、その気遣いさえも、自分を守るための手段になっています。これが、日本全体に広がっている「偶像礼拝」であり、バアル信仰と言ってよいでしょう。

ですから、キリスト者にとって偶像礼拝とは、必ずしも神社仏閣だけに限りません。むしろ、イスラエルの民が曲がりなりにも神への礼拝の形式を保ちながら、それでもバアルを拝んでいたというのは、私たちキリスト者に対して大きな警鐘を鳴らしています。私たちが、神社参拝もしないし、仏教の葬儀で焼香をしなくとも、実は、神を神としないで、神から与えられている賜物のほうを追求するということをしているなら、それは列記とした偶像礼拝です。ティモシー・ケラーという牧師が、「偽りの神々」という著書の中で、次の事を話しているそうです。「偽りの神とは、神よりも重要だと見なすもの。あなたの心と思いのすべてを吸収するもの。神からしか得られないものをそこから得ようとする、すべてのもの。あなたの人生の根幹を構成するもので、それを失おうものなら、生きる

価値さえ見出せない、と思われるようなもの。」¹このような貪りが偶像礼拝なのですが、意外に心の中に偶像があることに気づくのではないかと思います。神の名を呼び求めながら、実は神ご自身ではなく、神に関わることを大事にしている拘り、情熱というものが偶像礼拝となっています。

初代教会に、ステパノという人がいました。彼が御言葉を語っていると、聞いていたユダヤ人が怒り、彼を議会に引っ張り出して訴えました。「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。(使徒 6:13)」ということです。それでステパノは、彼らの前で弁明しました。彼はイスラエルの歴史を初めからずっと話していきました。イスラエルが荒野で金の子牛を作って、その偶像に供え物をしたことを言及しました。そして、幕屋の話をしました。主が命じられたようにそれを造りました。そして、ダビデが神の家を建てたいと願い、それはソロモンに引き継がれました。けれども、主はその神殿の中に入り込むのではないということを、言われます。「使徒 7:49-50 主は言われる。天はわたしの王座、地はわたしの足の足台である。あなたがたは、どのような家をわたしのために建てようとするのか。わたしの休む所とは、どこか。わたしの手が、これらのものをみな、造ったのではないか。」そしてステパノは、彼らが先祖たちと同じように聖霊に逆らっていると責めたのです。彼らは、神殿に住まわれる神ご自身をあがめているのではなく、神殿礼拝そのものが自己目的化し、神殿そのものを礼拝していた過ちを犯していました。それは、かつて金の子牛を拝んでいた偶像礼拝と変わりなく、神をあがめているようで、神についての礼拝をあがめていたのです。

マルタも同じ過ちを犯しました。イエス様がマルタとマルヤの家に来られるということで、彼女はもてなしをしました。けれども、そのことで心が忙しくなり、何も手伝わないマリヤのことについて不満を抱き、イエス様ご自身をも詰ったのです。なぜ妹に、手伝いをするようにお命じにならないのか？と。これは本末転倒ですね、イエス様ご自身に仕えているはずなのに、イエス様に命令してしまっているのですから。熱心になりすぎて、だれに仕えているのかを忘れてしまっている姿です。

1B 穀物とぶどう酒の豊かさ

そこで本文に戻りましょう。まず、「彼女に穀物と新しいぶどう酒と油とを与えた者・・が、わたしである」とあります。使徒パウロが言いました。「1コリント 4:7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」全てのものは、もらったものです。もらっていないものはないのに、まるで自分の力や知恵で獲得したかのように誇っていても、本当にそれが自分で獲得したものは何一つない、と言っています。神から全てが与えられています。けれども、いつの間にか私たちは、自分の手柄にしようします。これこれのことを、私がやっていたから、このようになったのだと、第一原因が神ではなく、自分自身であると思いがちになってしまいます。これは心の深いところで起こっているのです、なかなか見つけ出すことができません。

¹ <https://ameblo.jp/shinyayamauchi/entry-11472700187.html>

それを見つけることができるのは、「自分の献身や捧げ物を認められないとき」であります。また、「主の命令に従えない時」であります。シリア軍の将軍にナアマンがいました。彼はらい病を患っていましたが、イスラエルにエリシャという預言者が癒すことができるという話を聞きました。彼は馬と戦車を持って来て、エリシャの家の入口まで来ました。けれども、エリシャは使いをやって、使いに、「ヨルダン川に行って七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになってきよくなります。(2列王 5:10)」と言わせました。ナアマンが怒ったのです。自分がここまでやってきてお願いをしているのに、自分の体の患部に手を置いてらい病を直してくれると思っていたのに、それにシリアにある川のほうがはるかに優れている。なんで、あのみみっちいヨルダン川なのだ！と怒ったのです。これを言い換えると、「いろいろなことをしてもらわないと、困る！」ということなのです。神の恵みによって与えられるものではなく、自分が何かをしたということを誇りたいという思い、自尊心があるから起こるのです。そして、ヨルダン川に七たび入ることは、実に簡単です。けれども、その指示に従えないのです。主イエス様は、「わたしの負わせる頸木は軽い」と言われました。主の命令は重荷にはなりません。けれども、重くしたいのです。そうやって、自分が何かをしたのだということを、誇りたいと思っています。

けれども、ナアマンは部下に知恵のある人がいました。難しい事ではないのですから、神の人が言われたとおりに、素直にやってみましょうと勧めたのです。すると、ナアマンの肌は幼子のようにきれいになりました。こうやって、主により頼み、この方の命令に従うということは、幼子のように純粹で、単純なことであり、難しい事ではないのです。

2B バアルという支配欲

しかし、私たちには、幼子のようになるという心が持てません。幼子のように、全てを親に任せる、頼るというようなことがなかなかできません。それをすることは、「自分で自分のことを支配できなくなる」という恐れがあるからです。そこで本文に戻ってください。「**バアルのために使った銀と金とを多く与えた者が、わたしであるのを、彼女は知らなかった。**」と主は言われます。バアルという神は、カナン人にとっての最高神です。「主」というのがその名前の意味であり、地の農産物の収穫を増やす、人の多産を可能にするなど、万能な神としてあがめられていました。要は、「力をもった、支配する神」なのです。ですから、人々はバアルに取っつきたくなるのです。自分が自分のことを支配したいという欲望を満たしてくれるからです。

私たちは、自分のことは自分で賄いたいという、とてつもなく強い欲求があります。ユダにアハズという王がいましたが、預言者イザヤから、「あなたの神、主から、しるしを求めよ。」と言われたけれども、「私は求めません。」と断ったのを思い出します(イザヤ 7:11,12)。しるしとは、「これは主にだけしかできない」「これは、神のなせる業だ」というようなものであり、自分の理解や自分の力を超えてしまっているものであります。私たちが、神の徴を求めるといことは、自分の生活に、自分ではどうしようもならないことを認めざるをえないことを、求めることに他なりません。けれども、

それはしたくない、豊かな穀物や新しいぶどう酒がきちんと得られるのであれば、神などというものに頼るのではなく、確実に与えてくれるものを選びたいとします。それが、そのままバアルなのです。

3B 金や銀の力

そして、「バアルのために使った銀と金」とありますが、バアルのためには沢山の、お金をつぎ込むことができます。せつかく神が与えられた金銭ではありますが、それを自分がコントロールするために、注ぎ込んでいるわけです。これが、私たちが神に捧げることをしないで、他のものには情熱を傾けられる理由になっています。主は預言者マラキを通して、「3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」と言われました。持っている財産の十分の一ですから、かなりの割合です。けれども、それで試してみよと言われます。先ほどのアハズに対する、主からの挑戦と同じです。主に自分自身を明け渡すために、財産の十分の一をもって、主が何をなされるかを試してみなさい、ということです。ところが、私たちは計算します。主がなされることを楽しみに待つのではなく、自分の計算によって残り物だけを神に捧げます。そして自分が賄うことのできるものについては、とてつもない時間とエネルギーと、財を注ぐことができるのです。

2A 取り除かれる祝福 9

このように、主が全ての源であるのに、バアル信仰へ走って行ってしまった民に対して、その祝福を一時、取り上げるということをなされます。9節を再び読みます、「9 それゆえ、わたしは、その時になって、わたしの穀物を、その季節になって、わたしの新しいぶどう酒を取り戻し、また、彼女の裸をおおうためのわたしの羊毛と麻とをはぎ取ろう。」主は与えられるだけでなく、取ることもなさる方です。そしてその取り上げることは、真実に主を知ることであり、とても貴重な時となります。

1B 時を定められる主

ここで、「その時になって」「その季節になって」と強調しておられます。収穫については、主の与えられた時があり、その時に全く依存しています。どんなに努力したとしても、その時に良い条件が整えられなければ、その収穫は台無しになります。けれども、バアルを拝むことによってそれを確かなものとしていたのです。ちょうど、「天候が悪いのならば、ビニールハウスによって養成すればよい。」というような発想です。しかし、主は人々が全く、自分たちでは何もすることができないように、その時を支配しておられるのです。ソロモンは伝道者の書で、「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。(3:11)」と言いました。

時というものは、私たちがどうすることもできません。だからこそ、私たちは永遠、すなわち神を思うことができます。最近、私たちのことを長く知っている宣教師で牧師が、私に話してくれました。もうすぐで引越す話をした時に、「清正が住んでいるところでやったら？」と冗談を言っていました。

そうです、1997年に日本に戻って来て、教会を始めようとしたのが、今、住んでいる町だからです。そこで教会を始めようとしたのに、結局、本格的に始められたのは2011年です。そして、今、2017年、みなさんがここにおられます。彼が強調していたのは、「時」でした。これにはどうしても、私たちは抗うことができません。主が完全に掌握しておられる領域です。その中で主は、私たちを練り清め、訓練し、主の御心に形造られていきます。

2B 露わにされる裸

そして、「彼女の裸をおおうためのわたしの羊毛と麻とをはぎ取ろう。」と言われます。これは、彼女の来ている服を脱がせて、裸を見せて辱めるということです。かなり、きつい表現ではありますが、つまりは、自分の隠している部分が露わにされるということです。自分のプライドが、砕かれる時です。表向きは良く見せていて、人々には良く見られていても、心の奥底、隠れているところでは全くそうではないというようなところに、神は触れたいと願われています。そして、主はそこに触れて、ご自身の愛で包み、真実にご自身を知ってほしいと願われています。

私たちは、自分が露わにされることを恐れます。もちろん、それは嫌です。けれども、隠しながら生きていることは、自分の魂を押しつぶしていることも知っています。そしてその隠している中で、裁きの日、神によってすべて隠れたことが明らかにされ、申し開きしなければいけないことも知っているのです。けれども、イエス様のところに自身が露わにされた女がいました。長血を患う女です。彼女は、何とかして治したいと思い、医者に金をつぎ込みましたが、状態は悪化するばかりでした。そうです、自分で何とかしたいと必死でしたが、だめでした。自分の願いを自分でかなえようとするほど、その願いは離れていきます。けれども、イエス様がおられることを知り、群衆の中に入り込んで、その着物のふさを触りました。するとたちどころに、出血が止まったのです。そして、イエス様が、「だれかがわたしに触った」と言われます。そうです、彼女は隠すことができなかったのです。血を流している女は不浄の期間にいるとされていて、誰かに触れたらその人を汚すとされていました。ですから、それを人前で話すことは、自分のしたことをみなにばらすことであり、恐ろしい事です。しかし、今、自分は清められています。ですから、自分のことを人々にさらけ出すのですが、同時にそこから清められたことを証する、恵みでもありました。それで、彼女は話しました。イエス様が言われました、「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。(ルカ 9:48)」

私たちは、主によって取られる時があります。それは幸いな時です、しかし自分の裸が露わにされます。しかし、その恥を見せないといけなかった時に、実は主が全てを癒し、直し、覆ってくださるのです。私たちは隠せば、裁きの日全てが明らかにされますが、私たちが明かせば、全ての罪が赦され、清められ、義と認められた者として、大胆に神の前に、そして人の前に出ることが出来ます。イスラエルが、神に戻っていったように、私たちも、自分を他のいろいろなことで隠していたものをもって、イエス様のところに戻ることができます。